

人に感動を与えるものづくり

尾州テキスタイル・カレッジ講座4「織物は無限の可能性」担当 青井 大喜
(早善織物常務)

過去、人間は自分達の生活満足度を高めるため、自然を切り開き大量生産、大量消費、大量廃棄という一方通行型の時代を築いてきた。

それが地球環境を破壊し資源の枯渇化を招いている。新しい時代はエネルギーを出来るだけ節約し、モノを再資源化する「循環型社会」志向が求められている。

尾州テキスタイル・カレッジでは「織物には無限の可能性」が有ることを教育の基本としている。

織物は経糸と緯糸を直角に配列して上下に交差させて平面にしたものである。タテ糸とヨコ糸との交差、組み合わせ方を織物組織というが、この織物組織にはいろいろな種類がある。その上、使われる糸の種類や仕上げ方法が組み合わせられて、実に多様な織物が作られている。

最近、各産地のテキスタイルはグローバル化が進んでおり、簡単なものは中国をはじめ海外でほとんど出来てしまう。しかも安い価格で・・・。

日本のテキスタイルの切り口は、他に真似の出来ない差別化素材しか、存在価値がない。幸い日本の繊維産地は優秀な技術を持っている。それらの、色々な分野の技術を十分生かして新しい物作りに挑戦して行くべきではなかろうか。

今迄は同じ産地内でも競争しあっていたが、海外に立ち向かっていくためには、各地区とコラボレーションして共同で物作りを考え、新規商品を創り上げるべきと思う。お互いの特徴を十分生かし合って新商品開発に取り組むことが重要になった。

物作りの心構えとしては 人に感動を与える 良い商品で売れるものを作る、が基本だ。

この地区の繊維企業は分業で成り立っている。原料素材、紡績、撚糸、染色、製織、仕上げ、縫製から製品まで、与えられた各持ち場が百パーセントの力を出して初めて完成された製品(洋服)になる。お互いの持ち場のコリティコントロールを如何に出来るのか、で企業の評価が変わってくる。

商品開発には織物の元を知ることが大切である。カレッジを受けられる生徒さんは将来を担う若手、中堅はもとより、経験豊富な幹部社員でも基本がシッカリ習得されて無い方が多い。物作りには基本プラス創意工夫が施されていないと売れるものは出ない。それと作り手の顔が見える物、素材の持ち味を生かしているか、いないかでその商品の価値観が変わってくる。要するに物マネではダメである。良い商品を作りたい、売れるものを作りたい、と思う情熱、精神力を如何に持ち続けることが出来るかで決まると思う。尾州産地はファッション素材の一大産地である。ここで培われた織物の技術、意匠、企画ノウハウは世界に向けても確固たるものがあると自負できる。

織物設計では密度が大切である。ウールを扱う場合、縮みを想定に入れないといけない。規格設定が出来れば目付けが決まる。製織に掛るのにも目的の商品にするためには機種を選別も大切である。

この地区の織物は特に仕上げ(整理)が重要であり、ウールものは生かすも殺すも整理次第、しっかりした風合い出しが必要である。

テキスタイル・カレッジは繊維、織物の基礎体験を中心に学ぶカリキュラムを特徴としているが、実際の現場で発生したトラブルや消費者からの問い合わせなどにも講師が相談して答えるようにしている。